

在家教団というあり方

本来、仏道教団は出家僧と在家信徒により構成されています。

出家とは、その名の通り出世間という意味で、世俗の家を出ることはもちろん、世俗的な欲望を断ち、道を求め、その得たもので在家の人々を教化する立場に立つことを意味します。わかりやすい例を引けば、釈尊が釈迦国の王子である身を捨てて道を求める修行に入ったのが好例といえます。その他にも地位や名譽を捨てて僧となることを志し、出家した人々は数多くいます。

では、なぜ出家することが必要かといえば、仏教で説くところの教えは広く深いわけですから、長い年月にわたり厳しい修行を重ねて仏の教えを学び、それを在家の人々に施していくということになります。

在家とは、出家僧より仏の教えを受け、それを実社会で生かし実践していくことにより、教団の教えを世に広め、教団を護っていく人々を指しています。ですから仏道教団は出家僧と在家信徒が車の両輪となり、教団をより立てていくところに本来のあり方があるといえるでしょう。

ところが、いわゆる仏教系と称する新興宗教では、在家だけで教団を組織運営しているものが数多く見られます。立正佼成会もその中のひとつです。では、在家教団である立正佼成会は、僧を持たない教団としてどのような実態を持っているのでしょうか。そのことについて、立正佼成会の成立過程から見ていくことにしましょう。

立正佼成会の開祖・庭野日敬（にわのひつきょう）が近所の婦人から勧められて霊友会に入会したのは昭和九年のことでした。日敬は、それまでは九星・六曜・金神などの民間信仰や真言密教、それに

姓名学などを学んでいました。

さて、庭野が入会した霊友会は、祖霊信仰に法華経の仏語を混入させただけの浅い教義しか持っていない在家教団でした。そのためか、庭野は、一信徒として入会したにもかかわらず、翌年には、支部長になるほどの頭角を現していったようです。このような役職がとまるというのも、さしたる教義のない新興宗教ならではのようですが、昭和十一年には立正佼成会の脇祖となる長沼マサ（後の妙佼）を入会させています。

以後、庭野は長沼と組んで布教に励むことになりましたが、霊友会会長・小谷喜美の法華経軽視発言を憤り、それを機に霊友会を離脱し、昭和十三年三月に「大日本立正佼成会」という在家教団を設立したということになっています。

教祖になるということ

人は何かを求めて信仰の道に入りますが、その動機は様々です。ある人は悩みを解決したいと願い、また、ある人は自分自身を高めたいとの願いから信仰者となる場合もあるでしょう。しかし、それは、あくまでひとりの信仰者としてであって、教祖（教団の創始者）になることを意味するものではありません。ところが庭野は、ある時、突如教団を設立し、教祖となります。その足跡を具体的に見てみましょう。

庭野は、昭和九年、長沼は十一年に霊友会に入会し、十三年には「大日本立正佼成会」を設立したわけですから、数えてみれば庭野は四年、長沼に至っては二年間で霊友会を離脱し、新興宗教を作ったこととなります。当時、庭野は牛乳屋を営んでいましたから、その牛乳屋さんが一夜明けたら、新興宗教の教祖に収まっていたというわけです。ここにも僧

侶のいない在家教団特有の安直さの一端を見ることがができます。

この短期間の離脱と新興宗教の設立を善意で憶測するならば、庭野の中にはあるべき新興宗教のイメージがあり、それは霊友会とはまったく違った教義を持つ教団であったはずで、でなければ、離脱の意味も大義名分もありません。ところが、庭野と長沼が作った新興宗教は教義も霊友会の受け売りにすぎず、そのうえ、ひとりの野心家（庭野）が霊媒の女性（長沼）を誘い、新興宗教を作るところまで霊友会をつくりなのです。

その具体的な内容を挙げれば、総戒名をまつり、法華経によって先祖回向をするという教義などもその一例です。まったく、恥も外聞もなく取り入れたものだときれ返ります。もっとも、その取り入れた先祖供養も誤った法華経解釈によることは、いうまでもありません。（羅針盤第七号を参照していたければ幸いです）

仏教系在家教団を作ったといっても、庭野自身、きちんと仏教を学んだわけではありません。庭野にできることは、霊友会から取り入れた先祖供養、自分が過去に学んだ姓名判断、方位判断などの俗信、それに加えて長沼の霊媒による病氣治癒の祈祷（きとう）がこの新興宗教の実態だったのです。もちろん、後年、庭野が知り足りずに語る法華経も、この時点では、霊友会の一支部長である新井某の講義を末席で聴講していたにすぎず、知識や素養があったわけではありません。

本尊に迷走した佼成会の歴史

このように仏教についての深い知識や見識を持ち合わせていない庭野が、宗教の根幹である本尊に迷走するのは当然の帰結ということになります。その迷走

立正佼成会とは、どのような宗教か

ぶりをみてみましょう。

昭和十三年の設立当初は、霊友会当時の曼荼羅に毘沙門天を守護神としていました。ところが、それから二年後の昭和十五年頃には、中央に南無妙法蓮華經、その左右に「天壤無窮」「異体同心」などと書いた旗を中心とします。それから二年後の昭和十七年になると、今度はその旗の文字を掛け軸にし、大日如来を守護神として加えたものを拝みます。こうなると、本尊というよりは二年物のカレンダーではないかと錯覚してしまいます。

けれども庭野はまだまだ迷います。しかし、本尊の本義を知らないのですから自業自得といか言いがありません。今度は三年後の昭和二十年、「久遠実成大恩教主釈迦牟尼世尊」と日敬が手書きした物を本尊とします。しかし、まだ迷走は終わりません。三年後の昭和二十三年、再び曼荼羅（日敬が日蓮大聖人の本尊を模写したと称するもの）に変更します。まるで猫の目のようにクルクル変わる立正佼成会の本尊です。

さらに、妙佼が死んだ翌年の昭和三十三年、日敬は本年こそ「真実顕現の年」と叫び、今までは方便の時代であったから、本当の本尊を確定しなかつた。しかし、今こそ「久遠実成大恩教主釈迦牟尼世尊」を教団の本尊として決定すべき時であると宣言したのです。昭和三十三年、大聖堂完成と同時にその釈迦像を造って安置し、今に至っています。

このように、教団創立者自身が何を拝んだらよいのか迷いに迷ってきたのが立正佼成会の歴史ですが、そのどこに人々を救う道理があるのでしょうか。まさに、日蓮大聖人が「諸宗は本尊にまどえり」と喝破された通りではありませんか。

さらに、日蓮大聖人は『本尊問答抄』で「問うて云（いわ）く、末代悪世の凡夫は何物を以て本尊と定むべきや。答えて云く、法華經の題目を以て本尊とすべし。」と立正佼成会のような誤った本尊を厳しく破折されています。

立正佼成会の唱える題目

立正佼成会では、南無妙法蓮華經と題目を唱えています。その題目は日蓮大聖人が唱え出された題目とは一切関係がありません。なぜなら、日敬は、仏教の何たるかを知らずに日蓮大聖人を批判しているからです。

『法華經』が最高の教えであることは間違いないのですけれども、それを讀めるためにはほかの教典をけなしたりするのは、心得ちがいのわなければなりません（法華經の新しい解釈）

教典には高低、浅深（せんじん）があるということを知らずに戯言（ざれごと）を述べています。法華經の開經である無量義經には、「正直に方便の教えを捨てなさい。他の經の一偈も受けてはいけません」とはっきりと説かれています。

さらに日敬は日蓮正宗をけなして、「いまだに、楠の板ぎれなどを拝み、依存する人びとがあるようですが、そういう（物）に依存するくらいならば、宗教などはスッパリ投げ捨てたほうが賢明なのです。（法華經三部經5）ともいつています。では、立正佼成会が大聖堂にまつる釈迦像は一体何なのでしょう。

日蓮正宗では、日敬がいうような単なる「楠の板ぎれ」に依存などしていません。楠に刻まれたその御姿は久遠の御本仏、宗祖日蓮大聖人の御法魂であつて、本門戒壇の大御本尊という仏様であります。その仏様に私たちは帰依しているのです。

日蓮大聖人は「草木の上に色心の因果を置かずんば、木面の像を本尊に恃（たの）み奉ること無益なり」「観心本尊抄」とも「日蓮がたましひをすみにそめながしてかきて候ぞ、信じさせ給へ。」「經王殿御返事」とも御指南されています。この御指南からも、日蓮正宗が日蓮大聖人の教えを正しく護っている唯一の教団であることがよくわかります。

末法の仏様とは

仏教では末法という言葉がよく使われますが、末法とは、どういう時代を指す言葉なのでしょう。末法とは釈尊が亡くなられて後、二千年後の時代を意味する言葉なのです。末法の末とは、漢文では否定形として用いられ、末法とは、釈尊の法（白法）がなくなった時代、釈尊の法が効力を失った時代のことを指します。釈尊が入滅して後、二千年後、釈尊が説かれた教えに人々を救う力がなくなり、経巻のみがあるだけで、正しい修行も功德もなくなり、自然災害が多発し、不治の病が流行し、人々の間では争いの絶えない時代が訪れると経巻には説かれています。

では、末法に入り、釈尊の法が滅した後、どのような仏様が現れるのでしょうか。また、それは、一体、どの教典に説かれているのでしょうか。実は、そのことが釈尊の出世の本懐である法華經に説かれているのです。

釈尊は五十年間にわたり法を説いてきましたが、最後の八年間に自分自身がこの世に出現した一番の目的である最も重要な法を説かれました。その法こそが法華經だったのです。さて、法華經に説かれた末法の仏様についてですが、法華經には、どのように説かれているのでしょうか。

法華經には、その仏様は、末法に現れて法を説くが、ある時は、しばしば所を追われ、また、ある時は、時の権力者や出家在家の人々に迫害を受け、石を投げられ、杖で打たれ、あまつさえ、刀の難まで受けられながら、一切衆生を成仏に導き、幸せにする法を説いていくと説かれています。その仏様は、末法の衆生の闇を払い、人々が持っている尊い命を輝かせる大白法を所持され、その法を説くために、いかなる難も忍ばれるのです。

日蓮大聖人は、末法は一切衆生を救うために、法華經に予証された通り、数多くの法難に遭い

ながら、唯一無二の法を説かれました。そのお振る舞いは、まさに、法華經に説かれたそのまを身をもって行じられ、まさに、末法の仏様であることをその行動によって証明されたのです。このことからわかるように、末法に生きる現代の私たちが信じるに足る正しい教えは、ただひとつしかなく、その教えを説かれた方は、末法の仏様である日蓮大聖人なのです。

日蓮大聖人は、末法は一切衆生を真実の幸せに導くため、最高尊極の法である南無妙法蓮華經を唱え出されました。その日蓮大聖人の教えを七五十年間にわたって現在まで清浄に誤りなく受け継いできた唯一の教団が富士大石寺を総本山とする日蓮正宗なのです。

私たちは日蓮正宗の信徒として、法道院（池袋）で歓喜に満ちて信仰に励んでいます。どうか、みなさんも真実の仏法と出会って、かけがえない人生を光り輝かせてみてはいかがでしょうか。

